

幼少期の母子関係イメージ・父子関係イメージが 青年期の自立性に及ぼす影響

吉田愛純

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

問題・目的

愛着の本来の性質とは、「守ってもらえるということに対する信頼感」である。人は、このような信頼感をベースとして、社会性を発達させていく(中尾, 2012)。Asendorpf(2000)は安定型の愛着スタイルを作るためには、親は連続的で一貫した注意深い養育と保護を提供する必要があると述べている。橋本(2010)は、父親との愛着関係が高いと対人適応がよく、社会性を有しているが、低いと対人適応は柔軟性を欠き、消極的であると示している。特に高群の女子が低群の女子よりも、情緒が安定し対人関係も良い特性が認められた。このことから、父親との愛着関係が子どもの発達に影響を与えていると考えられる。また、森下・三原(2015)の女子大学生を対象とした研究では、「母親への愛着」の高さは、「異性不安」を直接高めていた。「父親への愛着」の高さは「不安定な内的作業モデル」を緩和し、それを介して「自己受容」を高めると共に「対人不安」や「異性不安」を低下させていた。

本研究では、幼少期の母子及び父子の愛着イメージが青年期の対人関係に及ぼす影響について、大学生を対象とし調査結果を基に検討する。特に、安定型愛着スタイルに焦点を当てる。

方法

対象と手続き: (1)調査対象者: 広島県内 H 大学の心理学系の学科に所属している学生 200 名(男性 100 名, 女性 100 名)に質問紙調査を行った。有効回答者は 180 名(男性 93 名, 女性 87 名)であった。(2)調査時期: 2016 年 10 月下旬に行った。**使用尺度および質問内容:** (1)基本属性: 学年, 年齢, 性別 (2)幼少期の母子関係イメージ尺度(酒井, 2001)16 項目, 6 件法 (3)幼少期の父子関係イメージ尺度(酒井(2001)の尺度の母親部分を父親に置き換えて使用)16 項目, 6 件法 (4)心理的自立尺度第 2 版(高坂・戸田, 2005)25 項目, 7 件法。

結果・考察

因子分析 幼少期の母子・父子関係イメージ尺度について最小二乗法・プロマックス回転で因子分

析を行った結果, 3 因子が抽出された。その中の安定型因子の信頼性係数は母親の場合 $\alpha=.85$, 父親の場合 $\alpha=.87$ であった。心理的自立尺度については最尤法・プロマックス回転で因子分析を行い, 5 因子が抽出された。その中の対人関係因子の信頼性係数は $\alpha=.86$ であった。

青年期の自立性への影響を検討 幼少期の母子関係イメージ尺度, 父子関係イメージ尺度の安定型因子得点と性別それぞれの主効果と交互作用項を独立変数とし, 心理的自立尺度の対人関係因子得点を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果, 有意だったのは母子関係の主効果 ($B=0.46, p<.001$), 性別の主効果 ($B=0.48, p<.001$), 母子関係と性別の交互作用 ($B=-0.40, p<.005$), 父子関係と母子関係と性別の交互作用 ($B=-0.19, p<.01$) であった。3 要因の交互作用項の結果について図 1 に示した。

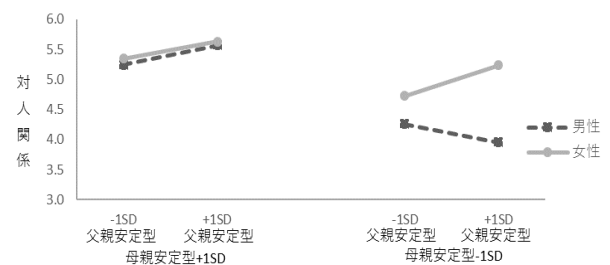


図1.対人関係における性別と安定型の母子関係イメージ得点高低・父子関係イメージ得点高低の交互作用

図 1 より, 幼少期の母子関係イメージ低群において女性のみ, 幼少期の父子関係イメージの高低において対人関係に影響があると認められた。このことから, 女性は母親との愛着イメージに関わらず, 父親との愛着イメージが良好だと適切な対人関係が築けると考えられる。森下・三原(2015)は「父親への愛着」の高さは「不安定な内的作業モデル」を緩和し, それを介して「対人不安」や「異性不安」を低下させていたと述べており, その知見とも対応すると考えられる。しかし, 男性においては父親の愛着イメージ高低で有意な関連はみられなかった。これは, 性別による両親への愛着機能の仕方に違いがある可能性を示している。そのため, 今後さらなる検討が望まれる。